大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

74 山田正珍 一

名著出版刊

南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 74 山田正珍(一)
第Ⅲ期 全40巻

昭和五十八年四月二十五日 発行

編者 大塚敬節 矢数道明
発行者 中村安孝
発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番(代)
振替口座 東京七—一〇七四六番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347－0972－8324

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

凡　例

一、本書第七十四巻「山田正珍㈠」には、『傷寒論集成』首巻～巻之三までを収録した。

一、本書は全て影印版によったが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

傷寒論集成　版本　（享和二年版）　十巻首巻一巻十冊（矢数道明所蔵）

一、解説は松田邦夫（日本東洋医学会常務理事）が執筆した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

山田正珍

松田邦夫

山田正珍小伝

山田正珍（一七四九〈推定〉―一七八七）は、傷寒論研究者必読の名著『傷寒論集成』を遺して、三十九歳で逝った英才である。考証の名家であり、古今の諸説と治験を渉猟して勘案の上、治方を決定すべしと提唱する折衷派に属し、かつ彼のいわゆる正中の正なる後藤艮山の流れを汲み、その学術は多紀一派と同日に論ずべきものではない。『傷寒論』を尊崇し、西洋医学に目を向け、同じく健康にすぐれず夭折した、かの永富独嘯庵（一七三二―一七六六）を想起させるものがあり、彼もまた独嘯庵を私淑していたと思われる。

山田正珍、姓は菅（けだし菅公より出づ―太田錦城）、氏は山田、名は正珍、字は玄同（はじめに多く用いる。）、また宗俊、図南と号す。また書斎を杏花園と云った。

幕府医官の家に生まれて

徳川幕府の医学館に、傷寒論を講じた山田正珍の家は、代々幕府の医官で、江戸昌平橋にあった。曽祖父は名を正芳、字は宗円、李陰と号した。この李陰の子が有名な麟嶼である。麟嶼は号で、名は正朝、字は大介、当時天下を驚倒させた、世に称する菅神童で、荻生徂徠は「千里の駒」と称し、室鳩巣は「天下第一の才子」と賛した程である。将軍徳川吉宗は特に命じ、医官の子ではあるが抜擢されて儒官に列せられ、あらたに二百石を与えられた。博く群書を究め、蔵書万有余巻、ということで、後に正珍の読書に事欠かなかったのである。しかし麟嶼は才子多病の例にもれず、享保二十年（一七三五）、痘を病んで没した。享年二十四。

麟嶼の子が正基（正熙）、字は宗円、桂渚と号して、即ち正珍の父である。儒官は祖父一代で、父は再び医官であった。

山田正珍の生年は、定説によれば享保十六年（一七三一）であるが、後述する享年の疑問より逆算すると、寛延二年（一七四九）となる。

正珍の時代

次に正珍の時代の医人をあげてみると、後藤艮山（一六五九―一七三三）の後を承けて香川修

庵（一六八三―一七五六）山脇東洋、（一七〇五―一七六二）吉益東洞、（一七〇二―一七七三）らは古方を唱導し、日本の医界に親試実験、すなわち今でいう科学思想を鼓吹した。

正珍の世代では、古方派としては中西深斎（一七二四―一八〇三）、岑少翁（一七三二―一八一八）、村井琴山（一七三三―一八一五）、吉益南涯（一七五〇―一八一三）があり、治術を第一とし、折衷派と称されたのは和田東郭（一七四四―一八〇三）、福井楓亭（一七二五―一七九二）、古方より蘭学に転じ、その首唱者となったのは杉田玄白（一七三三―一八一七）、小石元俊（一七四三―一八〇八）、桂川甫周（一七五一―一八〇九）らであった。

ちなみに杉田玄白が『解体新書』を著したのは安永三年（一七七四）、『蘭学事始』は文化十二年（一八一五）であった。

江戸では多紀元徳（一七三二―一八〇一）、元簡（桂山）（一七五五―一八一〇）父子ならびに山田正珍らは、多数の文献を渉猟して古書を考勘し、考証学派と称された。

その他、永富独嘯庵（一七三二―一七六六）、山脇東門（一七三六―一七八二）、亀井南冥（一七四三―一八一四）、中神琴溪（一七四四―一八三三）、片倉鶴陵（一七五一―一八二二）、原南陽（一七五三―一八二〇）、華岡青洲（一七六〇―一八三五）などの名があげられる。

考証学派については、本集成四十一巻『多紀元簡』の解説に、矢数道明先生が詳述されているのを参照されたい。即ち富士川游博士らの要約のように、

「古方派興って後世派医学の仮見謬説を排斥し、一世を風靡したが、その説は粗梗武断に過ぎ、その弊云うに堪えず。望月鹿門、浅井図南、次いで山田正珍、多紀元悳らが出て、遂に折衷派（考証学派）が興った。多紀氏はこの派の代表者である。」

「考証学派はその説穏当にして、考証に偏して独自の発明なく、治術の発展に貢献するところ少なしとの非難を受けたが、その出現と使命は歴史的必然、正反につぐ合であり……」

また岡西為人博士のように、「医学館を主宰した多紀氏一門は、博く古今の医籍を輯集し、清代考証学を導入して、厳正なる科学的史眼をもって、あらゆる医籍を批判検討し、医学の拠るべき所を闡明し、雑然たる古籍を整理して、一つの体系を確立したことは前人の企及し得ざるところで、江戸医学の一偉観たるを失わない。」ものであった。

少年時代

さて太田錦城の墓碑銘によると、

「君は人となり、魁偉清秀、聰敏英持、年歯を踰えるの時、書を誦する日に數百言、嶄然（ざんぜん。高く抽んでて峙つさま。）として頭角を見わす。衆謂って菅氏は世々神童に乏しからずと。稍長じて詩を賦し、文を属し、筆を下して休まず、俄頃（がけい。瞬時。）に千言、議論泉沸、踔厲風発し、人の能くこれに当るなし。」

とあり、正珍は、その祖父にも劣らぬ早熟の才子であった。家には祖父伝来の万巻の書籍があ

り、頭が良くて学問が好きというのであるから、その博識は少年の如くではなかった。

韓国使節との面接

彼は宝暦十四年（＝明和元年）（一七六四）、僅かに十六歳の少年で韓国の使節と面接し、李慕庵という医師、その他の随行者と詩文の応答を交換した。その筆談の終始は、『桑韓筆語』の一巻となって遺された。

彼の友人稲垣長章は、その序に於いて、

「韓人毎に図南を見て、その頴脱敏捷を賛し、奇童を以て称す。良医（李慕庵をさす）も亦その少年にして才学優長、特に軒岐の道に達し、兼ねて本草の学に明らかなるに驚き、數々後世畏るべしという。」

と述べ、同じ序に、父の同僚村岡医官は「余の同僚山田氏の子宗俊、年僅かに十六、風神秀朗、学術夙成」と賛嘆した。十六歳の少年正珍が、いかに堂々たるものであったかを推察することができる。

この筆談は二月二十三日鴻臚館（こうろかん。京都・太宰府・難波に設けられ、外国の来賓を接待した館。）で、医師慕庵とはじめられたものである。この時、彼は自著『骨度弁誤』一篇を持参して慕庵の一覧と序文とを乞うた。即ち筆談に「余、此の書一篇を著し、名づけて骨度弁誤という」とあり、その後に「別に経穴解・経脈解等あり、而して未だ脱稿せず」とあるより見れば、彼は十

六歳にして既に此等の著述をなしていたのである。その才、祖父に劣らずといわれるのも過賞ではないであろう。

儒学と医学館

彼は儒学を山本北山（ほくざん）に学んだ。北山（一七五二―一八一二）は折衷学派の儒者で、名は信有。江戸の人。井上金峨の門下で、経学・詩文に名を得、また医卜・天文・経済にも通じた。

それ故、正珍は太田（大田とも書く）錦城（きんじょう）（一七六五―一八二五）とは同門である。錦城は加賀の人で、名は元貞。皆川淇園、山本北山に学び、また和漢の諸儒の説を広く研究し、折衷学派を大成した。錦城が彼の『傷寒論集成』に序して、「吾友山田宗俊父、家世（家の者代々）医を業とし、幼より仲景の書を好む」といったのは、これがためである。(註1)

彼の医学は家訓によるのは勿論であるが、その他は医学館に受けたものであろう。

(註1)医学館は明和二年（一七六五）、徳川幕府の命を受けて奥医多紀元孝が江戸神田佐久間町に躋寿館を創設、漢方医術を教授した官医及びその子孫の養成機関。天明六年（一七八六）焼失、再建。寛政三年（一七九一）医学館と称す。

＊　＊

「これより後、君は好学甚だしく、日夜孜々として淬勵（さいれい。つとめはげむ。）、経史に淹通（えんつう。博く通ずる。）し、子伝(註2)に貫綜（かんそう。つきぬきすべる。）し、小説雑記を渉猟し、汎濫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（溢れ流れる）停蓄（とどまりあつまる）、蘊積（たくわえつむ）宏博にして深遠の涯涘（がいし。際限）なきが如し。」（太田錦城墓碑銘）

（註2）子伝は明の陸師道の字。嘉靖の進士。後、尚書少卿となる。詩文を善くす。ここでは子伝にも優る程に学問に秀でたの喩。

「初め素難を加藤俊丈に受け、本草を田村藍水に受け、陰陽運気の説、延年軽身の談、その蘊を研窮せざるはなし。」（同）

素霊の学を加藤筑水（俊丈）に従い、本草を田村藍水に学んだという。

傷寒論研究へ

「後漸くその非を悟り、自ら力を傷寒、金匱の諸書に用い、而して傷寒に於て殊にその精を極む。」（太田錦城墓碑銘）

後世方の勉学からスタートして古医方に開眼した点が注目される。かくして正珍が生涯最も力を入れたのは、『傷寒論』の研究であった。後年の医学館に於ける彼の講座も『傷寒論』である。

「凡そ千歳の註家を読み且つ通ぜざるはなし。正義を輯湊し、空理を削条し、信を本論に稽え、效を今病に験し、その未だ尽きざるところは群籍を参考し、百方に捜索して得るを以て期となす。一語関渉すれば引きて相徴し、一句近似すれば就いて相匡す。扳援（はんえん。ひくこと。）核博（該博）、証據精確、一字を苟くもせず、纖悉（せんしつ。微細なところまで行きとどくこと。）具備

し、沈潛鑽研すること積んで二十年、始めてその間奥（かんおう。）に至る。」（同）

錦城の流麗な筆致は、正珍の傷寒論研究態度をつぶさに写し出してゆく。その事実を私達はまさに『傷寒論集成』に徴することができる。浅田宗伯は『皇国名医伝』に、

「好んで傷寒論を読み、諸家註釈を聚め、その正要を摘み、章疏して之を節解し、一字の義訓も、参互考訂してその確当を窮む。」

と述べている。

錦城のこの部分の言葉で注意を惹くのは、「效を今病に験し」である。後藤艮山以来の親験実験の精神であり、正珍が実地臨床家としても優れていることを窺わせ、中西深斎と異る点である。彼の深斎観については後述する。

「君は又世医の古を唱えて古方に拘泥し、後世を忽略（おろそか）して固陋自ら安んじ、恬として恥を知らざるを嫉み、千歳の方書を渉猟し、天下の奇方を探羅し、多きを貪りて得を務め、雑碎して揖てず。抄集編録、矻々として年を窮む。故に能くその博を致す。古に泥する者は今に失し、今に拘する者は古に昧し。君の如きは古今に通じて、能くその長を纂むる者というべきなり。」

錦城ならではの文である。

こうして正珍は学も術も日に進み、従って来診者ならびに門弟が増加してゆくのは当然であるが、天は仮すに寿を以てせず、惜しくも短い人世を終えてゆくのである。

「事業は益々隆んに、声誉は益々振い、四方翕然として服従し、疾を輿して診を求むるもの、贄を載して業を請うものと踵は門に継ぎ、堂下に履は盈つ。」

「君の文を作るや、韓欧陽を奉じ、明に於ては宋漉を好み、條暢雄健、（略）」

錦城碑文は続く。

「書（『権量揆乱』。天明三年、一七八三刊）成るの頃、喀血数度、猶孜々として已まず。以てその好学精勤を見るに足る。然れども亦これを以てその天年を終うる能わざるなり。」

彼は生前に『傷寒考』（安永八年、一七七九刊）の一書を刊行したが、三十年の結晶たる『傷寒論集成』は、稿本のままで、上木を見ずに他界した。それは天明七年（一七八七）の春であった。彼の墓所は日暮里の南泉寺である。

「天明丙午（六年）の冬、瘵に寝ね、年を経て危篤、二月七日家に卒す。年四十二。」

享年については後述する。

「君は初め某氏を娶りて子なく、後に妾一男を挙ぐ。君の没する時、年僅かに数歳なり。」

彼には一子があった。名は正徳、字は宗見、又伯厚、攀龍と号し、彼の没後家をついで寛政十二年（一八〇〇）の夏、医学館の執匕に任ぜられたが、その翌享和元年（一八〇一）に、僅か二十一歳を以て夭逝した。

失われた墓

日暮里の南泉寺（臨済宗妙心寺派）には山田家墓地があり、はじめ麟嶼（碑銘は伊藤東涯撰）、正珍（碑銘なし）、攀龍（碑銘あり）の墓があったが、今次の戦禍にて爆弾のため、これらすべては飛散し、あとかたもなくなった。太平洋戦争は名医の墓を潰滅せり、と安西安周先生は歎かれた。

今年（昭和五十八年）三月に調査のため訪れた本書成の編集者・土屋伊磋雄氏はこれを確認されたが、正珍の子・攀龍の墓のみ残存していたとのこと。なお近くに本草学者・白井光太郎の墓が現存しているということである。

正珍の弟子

「季年には弟子増進し、その門に入るものもの十数人」と錦城撰にあるように、正珍のような大学者にしては門人数が少なかったのは、一に彼が短命であったためである。

「君の才と学とをして、これを仮すに寿を以てすれば、その施行するところ、あにこれに止まらんや。」

彼の門人には『傷寒論』の代講をした笠原雲仙、中村俊庵をはじめとして、阿部俊章、宇野恒明、林憲章、稲葉宗軒、永秀賢らがある。

錦城の碑文では笠原方恒（雲仙の名）が門下を代表したようであるが、今日から見ると、彼の学はむしろ中村俊庵によって後世に伝えられた感が深い。

中林俊庵、名は清熙、字は君緝、常陸笠間の人。天保五年（一八三四）没。享年七十五。その

山田正珍が葬られた日暮里の南泉寺

正珍の子、攀龍の墓
（正珍の墓は戦災で失われた）

古医術論

傳説言、事不師古、以克永世、匪説所聞、孔子亦称、我非生而知之者、好古敏以求之者也、医也亦小技、術係尤生、其仕非軽、若不徵之於古昔聖哲之訓、而妄取諸臆、則其不戕賊人命者幾希矣、可不慎邪、然烈山氏邈矣、毋論已、岐伯俞跗和緩扁鵲、惟聞其名、其書則不傳、如其傳於今者、悉出乎後人偽託、安足以為師哉、勿已則張仲景氏乎、仲景氏者、東漢人也、天帝時、仕為長沙太守、当此之時、大疫流行者数次、

正珍の学術を知るに有力な『新論』

男は清方、字は義卿、仁庵と称して『済衆堂治痘篇』の著がある。この書の序は浅田宗伯が書いている。宗伯門下高弟の一人である中林清風、字は穆如、はこの仁庵の男である。

稲葉宗軒も常陸の人で、『産要方』『復古試明録』の著がある。

享年の疑問

ここで問題となるのは正珍の享年である。以下に安西安周先生の考証を紹介する。

定説では天明七年（一七八七）に五十七歳で没したことになっているが、この五十七歳説は明白に誤りである。この誤算は彼を麟嶼の子としたことに由来すると思われる。彼の確実な享年は何歳か。二説あり、一は三十九歳、二は四十二歳である。

彼が天明七年に没したことは、『傷寒論集成』にある門人笠原雲仙の跋にも、「不幸天は之が寿を奪い、天明丁未（七年）の春、肺を疾んで逝く」とあることからみて明白である。

享年を三十九とする根拠は、『桑韓筆語』の宝暦十四年（一七六四）に十六歳であったということが主であるが、さらに明和八年（一七七一）の著である『天命弁』の末尾に、正珍二十三、四歳頃の著書目として『天命弁』の他数種をあげていることも、宝暦十四年に十六歳とすると、明和八年には二十三歳となって一致する。

他の四十二歳説は錦城撰の墓碑銘による。この碑銘は何故か南泉寺の彼の墓には刻されておらず、錦城の文集『春草堂集』中にあるのみである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com